

# 社会人教育における反転授業を取り入れた授業デザイン — 社会人学び直し大学院教育プログラムの実践における検証と考察 — Implementing Flip Teaching in Continuing Education-Verification of the Flipped Classroom Model Applied to Graduate Education Program for Executive-

西尾三津子（関西大学教育推進部）

柴 健次（関西大学会計研究科）

**キーワード** 社会人教育、学び直し、人材養成、反転授業、授業デザイン / continuing education, relearning, human resource development, flip teaching, class design

## 1. はじめに

関西大学は、文部科学省の「高度人材養成のための社会人学び直し大学院プログラム」の委託事業として、「海外子会社の経営を担う人材を養成する大学院教育プログラム（以下、学び直しプログラム）」の開発と検証を行っている。これは、社会人を対象にした「履修証明プログラム」の一つで、多忙な社会人のキャリアアップのために注目されている取り組みである（文部科学省 2015）。

学び直しプログラムでは、大学院が産業界等と協働して、海外子会社における経営者として必要な高度で専門的な知識や技術を身に付けることを意図し、社会人を対象に経営管理能力の育成を図るための「学び直し」を支援している。即ち、現地に関わる各種情報、地理歴史、経済情勢等に加え、経営に携わるための理論的で効果的な教育プログラムを提供することで、次世代の経営者の育成を目指している（関西大学 2016）。

多くの企業では、人材育成を目的とした社会人研修を実施しているが、講義中心の知識伝達や体験談を主とした研修が多く、学んだ事が現在の実務の場で活かされることが少ない。それは、学びのプロセスが、[講師による知識や情報の提供] → [話を聞いて納得し感動する] → [仕事や生活で活かすことはできず、いつの間にか忘れてしまう] という伝統的な研修モデルに依存しているため

ある（吉田 2006）。企業研修等の実態を調べる最近の報告では、受講者が参加した教育活動に関する課題として、「他の学習者との意見交換や協働作業が少なかった」、「講師が一方向的に話して自分が考える場面が少なかった」等の調査結果も提出されている（関西大学 2016）。それゆえ、社会人が能動的に学習に取り組み、彼らのもつ既習経験と新たな知識や技能を統合させ、実務に応用可能な実践的能力として習得するための教育プログラムの構築が求められている。

当プログラムでは、社会人の能動的な学習を支援するために、反転授業を取り入れている。ここでいう反転授業とは、対面授業の前に受講するeラーニングを用いた事前学習である。そこで、授業担当者は、授業の概要やポイントとなる基本的知識を伝達し、事前課題を課して受講者の予習を促す。一方、受講者は反転授業を受けて既習知識や自己の経験を想起し対面授業への意欲を高める。

反転授業には、①対面授業での理解を促進する ②受講者の実務経験や既習知識を整理させる ③受講者の目的意識を高める という効果があることは既に報告している（西尾・宗岡 2015）。さらに、反転授業を対面授業と接続させた授業プロセスには、【経験の想起の段階】【知識の獲得の段階】【経験と知識の統合の段階】の3つの段階があることが分かった（西尾 2016）。図1は、それらの

段階において、実践的能力の習得に関する要件を挿入した授業デザインのモデルである

そこで、本研究においては、反転授業と対面授業を接続させた授業デザインのモデルを、学び直しプログラムの実践に適応させ、社会人教育における授業デザインの要件について考察する。

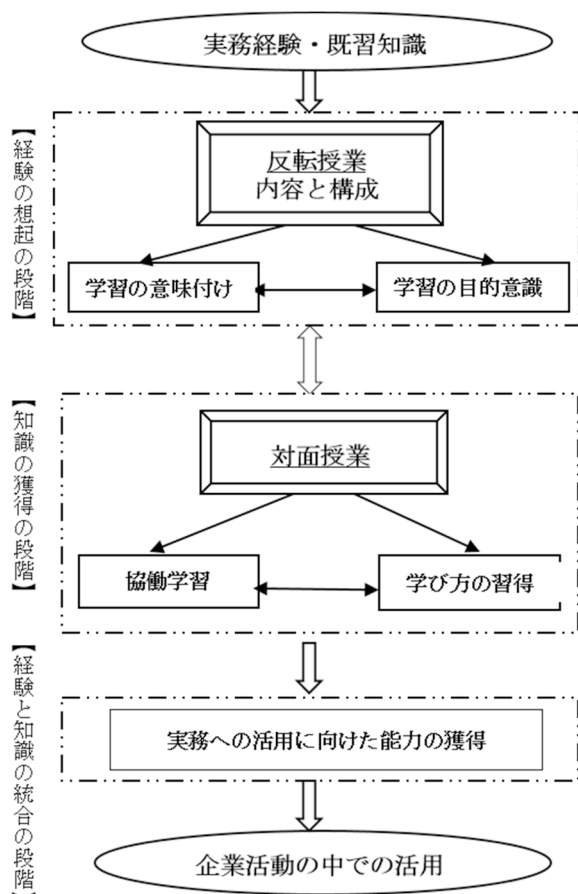


図1 反転授業を取り入れた授業デザイン

## 2. 「学び直しプログラム」の特長

### 2.1. 社会人のニーズに即したカリキュラム編成

当プログラムでは、平成26年度から平成28年度の3年間で試行と検証が行われている。平成28年度後期（平成28年9月～平成29年3月）は、本格第1期にあたり、大学教員等による「専門教育プログラム」と実務家教員等による「実践教育プログラム」を合わせた計25科目の授業を実施している（表1）。

表1 プログラム実施状況

区分	時期	科目数
試行第1期	H27.2～H27.3	2科目
試行第2期	H27.4～H27.8	10科目
試行第3期	H27.9～H28.3	13科目
試行第4期	H28.4～H28.8	7科目
本格第1期	H28.9～H29.3	25科目

科目の領域は、人文科学系・社会科学系・経営実務系・基礎的スキルの4カテゴリーからなる。受講者のニーズを把握しながら、各科目の連続性と科目間の関連を意識してカリキュラムを配列している。1科目の時間数は、(90分×4回)を1ユニットとし、[事前学習としての反転授業30分⇒対面授業90分×4⇒事後学習としてのeラーニング]のブレンド型授業を提供している。受講期間は、5～7か月を1クールとし、受講者自身が、[自己の経験の整理⇒省察⇒概念化⇒新たな場面での試行]という学習のプロセスを経て、実践的行動へ向かうことができるように、カリキュラムマネジメントに留意している。

これは、習得した知識や技能を用いて、受講者自らが今後遭遇する場面で問題解決のアプローチを策定し、解決に向けた働きかけを行うことを期待しているためである。

### 2.2 反転授業を取り入れた効果的な授業

当プログラムの反転授業は、1科目(90分×4)ごとに1回分の反転授業を実施している。受講者は、対面授業の2週間前に配信された反転授業を受講し、自己のペースで事前学習に取り組む。その中で、授業目的や概要を確認し、対面授業で学ぶ際に必要となる知識を理解する。また、授業担当者から出された課題に取り組むために、既習の知識や体験を整理する。これは、授業の前提となる基本的知識や情報の習得により、可能な限り受講者の経験知をそろえることを意図している。そうすることで、異なる背景をもつ社会人が対面授業での理解を促進させ、他者との交流を通して思

考を深化させることができる。

反転授業の要件として、「学習の意味付け」、「学習の目的意識」、「学習内容と構成」（西尾 2016）を科目の特性をふまえて機能させた。それは、受講者が自らの経験を学習内容と関連付け、学習への意欲を喚起させるためである。簡潔で明瞭な学習内容について、5分から10分の適切な分量をひとまとまりとし、4つのチャプター（C.1～C.4）を付けて構成の工夫をしている（図2）。チャプターを付けることで、社会人受講者の場所的、時間的な制限が緩和され、個々の目標に応じた学習を持続させることが可能になる。さらに、科目の目標に応じた事前課題を提示して、受講者の学習意欲を促し、対面授業への接続を図っている。

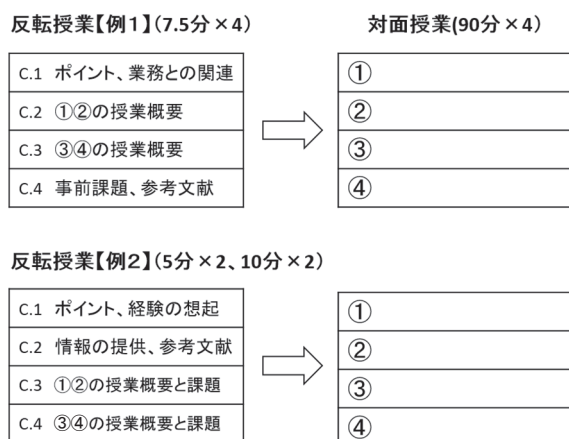


図2 反転授業例

### 2.3. 実務家教員のための授業設計

当プログラムでいう実務家教員とは、海外事業体で経営者としての実績をもち、優れた経営管理能力と豊富な経験知を有する講師である。彼らは、組織の長として各企業で高い経営能力を発揮してきたが、不特定多数の学習者を対象に授業を行った経験はほとんどない。そのため、学習者を主体とした授業がイメージしにくく、容易な「教え込み型」講義になりがちだった。そこで、授業設計にあたり、インストラクショナルデザイナーが複数回、ヒアリングを行った後、実務家教員と協同して授業の計画や準備を進めるようにした。

これらの授業設計のポイントとして、

- ① 到達目標と学びのプロセスを明確にする
  - ② 受講者が「何を」「何のために」「どのように学ぶのか」「学んだことは何に役立つのか」という点を自覚できるようにする
  - ③ アクティブラーニングの手法を取り入れる
  - ④ 学習を振り返る場を意図的に設定する
- の4つの点を重視した。

そして、本格第1期より反転授業と接続させた授業モデルを活用している。授業プロセスの各段階では、以下の実践的能力を習得する。

#### 【経験の想起の段階】

- ① 「学習の意味付け」を通して学習内容の価値を実感し自己の経験や知識を再構成する。
- ② 「学習の目的意識」の明確にして、実務に活用可能な実践的知識を習得する。
- ③ 反転授業の「学習内容と構成」の工夫により、学習意欲を向上し持続させる。

#### 【知識の獲得の段階】

- ① 受講者同士が学び合う「協働学習」の場を設定し能動的に学習に参加する。
- ② 各科目で提供される実践事例を通して「具体事象→抽象化→応用可能な知識や技能」への変換する方法として「学び方の習得」を促す。

#### 【経験と知識の統合の段階】

- ① 自己の課題を明確にし、「実務への活用」に向けた実践的知識を再構成し活用を図る。

### 2.4. 受講者のニーズ調査とFD活動

当プログラムに参加した受講者には、

- ① プログラムへの参加動機が明確である
  - ② 学習意欲や目的意識が高い
  - ③ 企業内で一定の役職をもつ
  - ④ 学習時間の確保が困難である
  - ⑤ 実務経験年数や業種の幅に差異がある
- という特徴がある。彼らは、企業内で多忙であり責任ある立場に就いている。このような自由な学習時間を持ちにくい受講者に対して、効果的で自己の変容が実感できる授業のあり方についても考

案してきた。社会人が自己の変容に目を向け、学習効果を高めていくために、各講義の終了時にアンケート調査や個別のインタビュー調査を行った。その後、データの分析と考察を通して、学習効果や受講者の意識、課題等を明らかにし、授業内容や学習環境の改善に活用するようにした。

一方、授業担当者に対しては、

- ① 授業評価アンケートの結果の分析
- ② 授業についての成果と課題
- ③ 社会人学習者に対する配慮
- ④ 反転授業と対面授業との接続面での留意点の4項目についてリフレクションを実施した。

このリフレクションは、授業終了後、全授業担当者を対象に個々に実施している。その中で、社会人受講者の効果的な学習のあり方を明確にし、教育内容や指導方法について改善の視点を見出すことができたと考える。

### 3. 研究の目的と方法

本研究の目的は、反転授業と対面授業を接続させた授業デザインを学び直しプログラムの実践に適用させることを通して、社会人教育における授業デザインの要件について考察することである。多忙な社会人受講者に対して、能動的で目的意識の高い学びを促すためには、効果的、効率的な学習の継続が必要である。そのため、授業に不慣れな実務家教員の働きかけを、本授業デザインの要件を指針という形で提案することに意義があると考え。具体的には、実務家教員が行った授業を事例とし、本授業デザインに基づいた授業実践を分析し検討することで、効果的な授業デザインの要件を考察する。

この考察に着目したのは、反転授業を取り入れた授業を受けた受講者と、対面授業だけを受けた受講者のアンケート調査の結果による。アンケート調査の比較検討を通して、反転授業と対面授業の接続の意義を見出すことができた。

研究の対象は、実務家教員による「海外子会社経営における人事労務管理」の科目を受講した受

講者である。当科目は、試行第4期（授業A）と本格第1期（授業B）において同一内容のものがそれぞれ4コマ（90分×4）ずつ実施された。両授業ともに、授業担当者と到達目標は共通している。授業Aでは、反転授業を実施せず、事前課題のみを文書化して提出を求めた。そして、対面授業の指導計画を作成し実施された授業である。授業Bは、反転授業を実施し、反転授業と対面授業を接続させた授業デザインに基づく指導計画を作成し実施された授業であった。

授業Aと授業Bの効果を比較するためにアンケート調査を実施した。得られた有効回答は、授業Aでは28名、授業Bでは10名の受講者である。

アンケート調査は、受講者の学習態度や意欲、学習成果に関する項目について、「5：強く思う～1：全くそう思わない」の5段階尺度で問うものである。その中で、特に10項目の設定に着目した(表2)。アンケート調査の考察に際しては、授業Bの反転授業の成果と課題に関する自由記述を活用するようにした。

表2 アンケート項目(抜粋)

①	授業を受けるにあたり、授業科目に関する基礎知識をもっていた。
②	授業を受けるにあたり、書籍や情報を調べるなどして予習に取り組んだ。
③	授業によく出席していた。
④	授業を受けて知的好奇心が刺激され、自分の意欲が高まった。
⑤	授業の中で、既習知識やスキルを活用して課題について考えることができた。
⑥	他者との協働学習やディスカッションに積極的に参加することができた。
⑦	今後もこのような授業を受けて、さらに自分の能力を高めたい。
⑧	事前課題のレポート等に取り組んだ。
⑨	授業の内容や方法は、自分のニーズに合致するものであった。
⑩	授業の難易度や進度は、自分の理解を深めるのに適切であった。

### 4. アンケート調査の結果と考察

アンケート調査の結果、＜強く思う＞と

<そう思う>を肯定回答とし、<そう思わない>と<全くそう思わない>を否定回答とした。表3は、授業Aと授業Bを比較した調査結果である。

表3 アンケート調査の比較

共通設問項目	授業A	授業B
①授業を受けるにあたり、授業科目に関する予備知識をもっていた。	35.7%	30.0%
	42.9%	40.0%
②授業を受けるにあたり、書籍や情報を調べるなどして予習に取り組んだ。	25.0%	50.0%
	64.3%	0.0%
③授業によく出席していた。	92.9%	80.0%
	3.6%	10.0%
④授業を受けて、知的好奇心が刺激され自分の意欲が高まった。	78.6%	90.0%
	3.6%	0.0%
⑤授業の中で、既習知識やスキルを活用して課題について考えることができた。	78.6%	80.0%
	14.3%	0.0%
⑥授業の中で、他の受講者との協働学習やディスカッションに積極的に参加することができた。	89.3%	90.0%
	3.6%	0.0%
⑦今後もこのような授業を受けて、さらに自分の能力を高めたい。	75.0%	80.0%
	3.6%	10.0%
⑧事前課題のレポート等に取り組んだ。	78.6%	100.0%
	7.1%	0.0%
⑨授業の内容や方法は、自分のニーズに合致するものであった。	60.7%	60.0%
	17.9%	0.0%
⑩授業の難易度や進度は、自分の理解を深めるのに適切であった。	71.4%	80.0%
	10.7%	10.0%

上段は、肯定回答率、下段は否定回答率

前提条件の調査(問①)から、授業Aでは35.7%、授業Bでは30%の予備知識を持っており、両授業ともに30%以上の受講者が科目に対しての予備知識を有していることが分かる。反対に、授業内容について予備知識を持たない受講者は、授業Aでは42.9%、授業Bでは40%であった。このことから両授業ともに、受講者の前提条件は不揃いであるものの予備知識の有無の割合に大きな差異はみられないといえる。

出席状況(問③)をみると、授業A、Bともに80%以上となっている。人事労務管理に関する知識は、受講者にとって実務上必須の内容であるため、多様な知識と経験を連動させた実践的知識の習得を目指した受講者の意識の高さが読み取れる。

このように両授業には、意欲や態度等の授業への参加姿勢について大きな差異はみられない。しかし、授業に向けた事前学習への取り組み(問②)、学習意欲の向上(問④)、実践的思考(問⑤)、協

働学習への参加(問⑥)、事前課題の提出(問⑧)、理解の深化(問⑩)の項目においては、授業Bの肯定回答の割合は授業Aより高く、否定回答の割合は低い結果であった。そこで、特に反転授業と対面授業を接続させた授業設計の効果に関わる側面に注目し、考察を加えていく。

「授業を受けるにあたり、書籍や情報などを調べるなどして予習に取り組んだ」(問②)という設問に対する肯定回答は、授業Aでは25%、授業Bでは50%であった。一方、否定回答は、授業Aでは64.3%、授業Bでは0%である。これは、反転授業の受講により対面授業への関心を高め、主体的な学習に取り組もうとする受講者の意識の表れであると考えられる。また、「事前に課題を整理することができた」(受講者10)や「人事労務について調べる過程で、社内の人事労務担当者とも話し合いをして自社の課題や問題点も知ることができた」(受講者12)という受講者の自由記述から解釈すると、反転授業は、受講者の既習知識や経験知の整理を促し、実務への認識を高めることにも関与していると考えられる。

「授業を受けて、知的好奇心が刺激され自分の意欲が高まった」(問④)という設問に対する肯定回答は、授業Aでは78.6%、授業Bでは90%であり、否定回答は、授業Aでは3.6%、授業Bでは0%であった。また、自由記述の中に、「先生の経験に基づく説明を聞いて、授業を受けるにあたり興味をもつことができた」(受講者8)や「事前に人事労務管理を行う目的や基本的内容を勉強することができて、講義前にある程度知識が身についたのでよかったと思う」(受講者6)という受講者からのコメントがあった。このことから、反転授業を受けて学習の構えが形成され、そのことが対面授業での能動的な学習参加へとつながっていたと考えられる。

「授業の中で、既習知識やスキルを活用して課題について考えることができた」(問⑤)という設問に対する肯定回答は、授業Aでは78.6%、授業Bでは80%であった。一方、否定回答は、授業A

では14.3%、授業Bでは0%であった。問⑤に関連する自由記述の中で受講者は、「事前に授業の内容を少し理解できたため、実際の授業にすんなりと入ることができた」（受講者9）や「授業の目的や方向性が事前にわかり、授業の理解が深まった」（受講者14）と述べている。これらのコメントから、反転授業での学習が対面授業での理解の深化につながり、反転授業と対面授業の接続が学習効果を高めるために一定の機能を果たしていると考えられることができる。

「授業の中で、他の受講者との協働学習やディスカッションに積極的に参加することができた」（問⑥）という設問に対する肯定回答は、授業Aでは89.3%、授業Bでは90%であり、否定回答は、授業Aでは3.6%、授業Bでは0%であった。受講者は、「講義でのグループディスカッションで実例と向き合えたことがさらに理解を深めることにつながった」（受講者6）や「既存の知識をディスカッションでメンバーと共有できたことは有意義であった」（受講者10）」と述べている。これらのコメントから、反転授業での学習が対面授業での活発な議論につながり、受講者自らが、他者から新たな視点を獲得し得る協働学習に価値を見出しているということが分かる。

以上の結果から、反転授業の実施は、社会人の既習知識や実務経験を対面授業の内容に接続させることで価値を生み出すということが分かる。そのためには、反転授業と対面授業を接続させた効果的な授業デザインの検証が重要である。

### 5. 授業デザインの考察

授業デザインの基本モデルに基づいて、【経験の想起の段階】【知識の獲得の段階】【経験と知識の統合の段階】の3つの段階に各要件を取り入れ、授業Bの指導展開の流れを構想したのが図3である。これは、2章3節で述べた実務家教員のための授業設計の中で説明した授業プロセスの流れである。

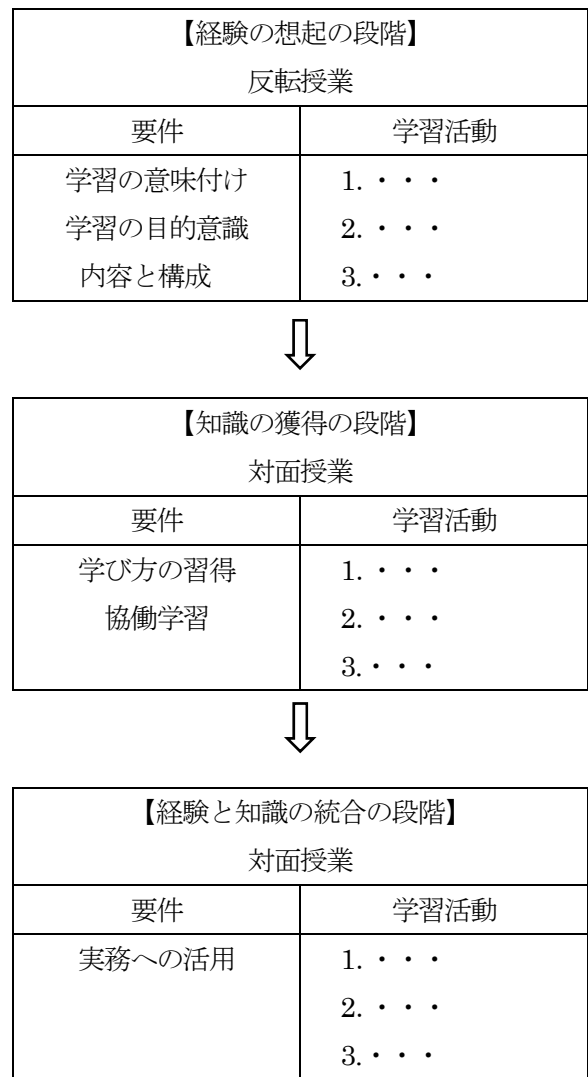


図3 授業Bの指導展開の流れ

表4は、授業Bの実践において、反転授業と対面授業を接続させた授業デザインに基づいた指導計画である。この中で、授業の要件項目に○印を付したのは、基本要素として授業計画を立案する際に位置付けたものである。しかし、授業を実践していくにあたり、実務家教員の直接経験と受講者の間接経験との近似の度合いを高めるために重要と考えた要素が新たに加わった。それには、★印を付して区別している。新たな要件は、「自己の認識」「フィードバック」「経験知の共有」「イメージ化」「振り返り」「練習の場」であり（表5）、基本要件に加えて指導計画に位置付けた。

表4 授業デザインに基づいた指導計画(全4コマ)

段階	授業	授業の要件	学習活動
経験の想起の段階	反転授業	○学習の意味付け	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 反転授業(チャプター①)の視聴を通して、授業概要や授業の流れを知り、学習のゴールを明確にする。自身の問いを立てる。</li> <li>2. 反転授業(チャプター②)の視聴を通して、本科目の価値を実感し、実務との関わりを意味付けする。既習経験や知識を整理して、自分が到達すべき目標を明確にする。</li> <li>3. 反転授業(チャプター③)の視聴を通して、科目内容に関わる基礎的な知識や人事労務管理特有の用語、考え方を理解する。</li> <li>4. 反転授業(チャプター④)の視聴を通して、人事労務問題に関する事前課題を知る。事前課題に取り組むための資料や情報収集の仕方を習得し、事前課題に取り組む。</li> </ol>
		○学習の目的意識	
★自己の認識			
○内容と構成			
知識の獲得の段階	対面授業①	★フィードバック	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 本科目のゴールと流れを確認する。 「海外子会社の経営者として人事労務管理に対処する際のポイントを提案すること」</li> <li>2. 事前課題についてのフィードバックを通して自分なりの問題意識や問いについて話し合い、講師の経験知を共有する。</li> <li>3. 人事労務管理に関する3つのトラブル事例を知り、各事例の背景や原因についてグループで分析する。事象のとらえ方、情報分析の仕方や考え方(具体⇒抽象化⇒具体)、発表の仕方等の学び方を習得する。</li> <li>4. グループワークの過程で新たな疑問や分析過程を他者と共有し、イメージ化を図りながら活動の質を高める。</li> </ol>
		★経験知の共有	
	○学び方の習得		
	★イメージ化		
対面授業②	○協働学習	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 思考過程を視覚化し他者と共有するために、シンキングチャートを活用し、グループでの議論を活性化させる。</li> <li>2. ゴールを明確にして、提案内容(問題対処法の概要、対処に際して獲得すべき情報や知識)を整理し、協働学習を行う。</li> <li>3. プレゼンテーションの評価方法として、ルーブリックについて理解し、評価基準を意識して発表の準備をする。</li> <li>4. グループワークの中で随時、質問タイムの時間を設け、自身の学びを省察し改善する。</li> </ol>	
	○学び方の習得		
★振り返り			
対面授業③	★練習の場		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. プレゼンテーションの資料を準備する。</li> <li>2. ルーブリックに基づいてプレゼンテーションを行う。 聞き手は、発表を聞きながら評価カードに、(P:良かった点、M:改善が必要な点、Q:新たな疑問点)を記入する。</li> <li>3. 評価カード(PMQ)をもとに、質疑応答を行う。 グループからの疑問点はWBに整理し、ポイントを明確にしながらか議論が深まるようにする。</li> <li>4. 講師は、各グループの発表に対するコメント(PMQ)と到達目標への方向付け、今後の課題を提示する。</li> </ol>
対面授業④	○実務への活用	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 本時のテーマ「海外子会社の経営者として人事労務問題に対処する際のポイント」について、自分の考えを書きまとめる。</li> <li>2. 書きまとめたことを発表し合い、意見交流をする。</li> <li>3. 本科目の学習のまとめとして、実務への活用の可能性について振り返りを行う。</li> <li>4. 今後の学習として、他の科目との関連に目を向ける。</li> </ol>	
		★振り返り	

表5 授業プロセスにおける新たな要件

授業プロセスの段階	新たな要件
【経験の想起の段階】	自己の認識
【知識の獲得の段階】	フィードバック 経験知の共有 イメージ化 振り返り
【経験と知識の統合の段階】	練習の場 振り返り

さらに、授業担当者である実務家教員とのリフレクションの際に、授業Aと授業Bとの実践の比較という観点で、以下のようなコメントが得られた（1月13日のリフレクションより抜粋）。

- ① 前回の人事労務管理の授業では、反転授業はしていない。事前にペーパーを出していくつかの事前課題に取り組んでもらった後、対面授業があった。今回はある部分、これから授業をしてもらう人に事前に認識してもらうことを、ある程度伝えることができた。
- ② 以前の授業と今回の人事労務管理の授業を比較すると、今回の方が授業効果は高かったという結果が出ている。前回と比べると、対面授業をふまえて自分自身の反転授業の意味をまとめることができた。自分自身の授業への理解も深まった。
- ③ 事前課題について、対面授業の中で取り上げたのは効果があった。また、反転授業と対面授業の接続も意識的に行うことができた。インストラクショナルデザイナーの支援を得て、自分の理解度が依然と比べて大きく変わり、自信がもてたように感じる。授業像もクリアなものになったので授業が楽しかった。

このことから、授業デザインの効果として、実務家教員による授業に対する理解を深め、教育の質を高めるための指導意欲を向上させる側面もあるということが分かる。

## 6. まとめと課題

本研究では、反転授業と対面授業を接続させた授業デザインを学び直しプログラムの実践に適用させることを通して、社会人教育における授業デザインの要件について考察した。

社会人教育における授業デザインは、高等教育とは異なる要件を有するものであると考える。本研究においては、反転授業と対面授業を接続させた授業プロセスの各段階で、指導上の鍵となり得る基本要件を授業展開の中で具体化した。その後、授業実践を通して要件について考察し、新たに生成された重要な要件を加えることができた。この授業デザインは、今後の社会人教育を行う上での指針になると考える。

今後の課題としては、学び直しプログラムにおける他の科目を対象に、反転授業と対面授業を接続させた授業デザインを用いた検証を行う必要がある。さらに、社会人教育において、効果的な授業を実施していくための授業デザインの要件と、科目の特性との関連性についても考察していきたいと考える。

## 参考文献

- 関西大学（2016）「海外子会社の経営を担う人材を養成する大学院教育プログラム」成果報告書  
産学連携によるグローバル人材育成推進会議  
（2011）「産学官によるグローバル人材の育成のための戦略」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/shitu/sangaku/1301460.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shitu/sangaku/1301460.htm)（情報取得 2015/1/23）  
鈴木克明（2002）「教材設計マニュアルー独学を支援するためにー」北大路書房  
鈴木克明（2015）「研修設計マニュアルー人材育成のためのインストラクショナルデザイナーー」北大路書房  
中原淳 編（2006）「企業内人材育成入門」ダイヤモンド社  
西尾三津子（2015）「社会人教育における反転授業の可能性に関する一考察」『日本教育工学会第



- 31 回全国大会講演論文集』 pp.499-500
- 西尾三津子 (2016) 「社会人教育における反転授業を取り入れた授業設計」『日本教育工学会第 32 回全国大会講演論文集』 pp.845-846
- 西尾三津子・柴健次 (2016) 「実務家教員による授業の効果についての考察」『日本教育メディア学会第 23 回年次大会研究発表集録』 pp.70 - 71
- 西尾三津子・宗岡徹 (2015) 「社会人教育における反転授業の効果」『日本教育メディア学会第 22 回年次大会研究発表集録』 pp.182-183
- 文部科学省 (2015) 「高度人材養成のための社会人学び直し大学院プログラム」 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kaikaku/manabinaoshi/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/manabinaoshi/index.htm) (情報取得 2016/4/10)
- 吉田新一郎 (2006) 「『学び』で組織は成長する」  
光文社新書
- 吉田新一郎 (2006) 「効果 10 倍の<教える>技術」  
PHP 新書
- Muneoka,T.,Nishio,M. “An Attempt at Flip Teaching in Continuing Education-Implementation of a Graduate Education Program for Executive Development-” (unpublished) Journal of Accountancy, Economics and Law No.10 March 2016, pp.11-27 ;School of Accountancy Graduate School of Kansai University,Osaka,Japan

西尾三津子 (関西大学教育推進部)

柴健次 (関西大学会計研究科)